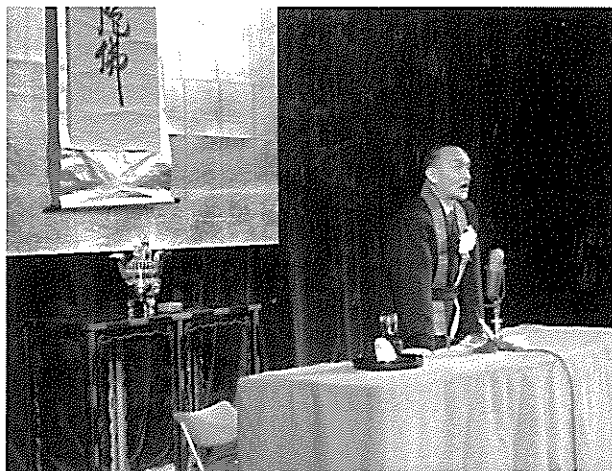


# 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動—

## 点描

### 宗門百年の大計は、菩提寺的關係に転落した教団の実態を道場にする



訓覇信雄師は、全国各地で真宗同朋会運動の精神を師子吼した(写真:東本願寺出版部)

# 1963 昭和38年

(前号から続く)  
特伝と云うと、特派布教師の派遣のように思って居られるが、そうではないのであります。本山に指定奉仕に来られた或る住職が言っておられるように、本山がやらんでも我々自身が出来ればやらねばならぬものなだと言う事でありませう。

教団、寺の当面している内外の実情を率直に認識するならば、いやでも応でも立ち上がらねばならぬと言ふ事でありませう。

西本願寺では末寺相談員、これは人から聞いたのであるが、天理教で修理班と云うものを派遣している。これは建物の修理ではない、教会の教化が停滞している、所謂

ない訳ではないのです。

### □第一特伝の結果

7月からの特伝の結果注目すべき事項を申しあげるならば、新興宗教の進出により、心ある門徒は切歯扼腕していると言ふ事である。寺の教化に住職が立ち上がるのを待ちあぐんで居る。すでに遅すぎるではないかと云われているのであります。その反面住職に対する不信の念は我々の想像以上で、甚だしいのは憎悪に近いものすらあるのであります。自分が門徒になつて居るのは、年回法要を勤めてもらうためでない、念仏で助かる教えが聞きたいからである。にも拘わらず住職は逃げたり、満足返事をしてくれんと云う。特伝に集まる門徒の中で住職の不信を訴えぬ者は殆どないと云つていい程度であります。然し一面、言っている中は期待があるからであるとも云えるので、全然無関心で、寺や住職などどうなつてもよいと云う処もあるのです。文句がなかつたら大変であります。文句のある中は脈があるので、この中に早く菩提寺的関係を急い

で教化信心のパイプに切りかえねばならぬのであります。

次に同朋会の会員制と云うことについて。大きな寺の住職は農地解放のようなものでないかと云うが、そうではないので、散在した部落部落に〇〇寺同朋の会と云うのを作れば、却つて結果が出来ると言ふ実例もあるのであります。その代わり月一回は住職が廻るか、信頼出来る布教師を派遣せねばならぬと云う事でありませう。この時は同朋新聞をテキストに活用するのであります。

又、何処からでもある注文は、勝れた講師、門徒に成る得る講師が全国的に望まれて居ります。次に特伝に於ける門徒の質問内容を検討する時、恥ずかしい事ではあるが、真宗教義に対する基礎的教養が極めて低い、殊んど欠除していると言ふ事でありませう。然しながら低級初步的ではあるが、座談会に於いても、第二義的、例えば本山の取扱がどうのと云うようなものが従来は大部分を占めていたが、特伝に於いては信仰問題に大部分が絞られて、極めて真剣に質問されて居ると云う事でありませう。

教線の修理をするのである。要するに特伝は、云うならば修理班である。教化が浸透していくように修理するのであります。住職と門徒の間に教化のパイプが通じるように修理するのが特伝の根本的な願いなのであります。

北海道教区は教学委員会の御苦勞で一応の態勢はいち早く出来て居るが、寺を中心に門徒と住職が一体になつて教化のパイプを通すようにする、効果を挙げるといふ事は中々困難な問題であります。久留米教区のある組、これは組長が非常に熱心で、殆ど一ヶ月の間法要を犠牲にして、各寺へ何回となく歩み運び趣旨の徹底につとめ、平生参らん者や若い者を集めた所、或る人は、特伝の趣旨を聞いて、寺は葬式をたのみにいく所かと思つていたが信仰の話をする所とは驚いたというのです。これにはこつちが驚いた次第であります。

金沢の或る地区では門徒が立ち上がつて居る。同朋壮年研修会に来て、こう云うものが仏教なら、これはやらんらん、一体住職はどうして居るのか、住職がつるし

す。この実情からして、先ず一歩退いて、初歩的基礎教養を身につけてもらう事が大切な事であらうと思つて居ります。

### □都市開教の問題

同朋会の今一つの問題は、大都市へ転入した門徒の人々、都市開教都市伝道の問題であります。昨年七月から東京の教研分室を重点として調査研究の歩みを進めた訳であるが、之は各寺から報告されたカードに基づき個別訪問して現在約千世帯位を確保している。1月から例会を開いている。最初集まった者は50人程であつたが、驚いた事に一人残らず創価学会の折伏を、多いのは45回もうけていると云うのである。教団としても無責任に放置して居るのであるが、今は門徒の人が中心になつて夫々自分の手で教勢の拡大をはかり、創価学会に走つた門徒の奪回を企図している状態であります。

### □結言

要するに宗門百年の大計は、菩提寺的関係に転落して居る教団の実態を率直に認識して、信仰教化

上げにあつたのです。住職は本山が要らん事をやる。黙つておれば葬式と法事で結構持つて行けるのに、本山はいらんことたきつけて迷惑至極だと云つて居る。

北海道はまだ開拓者の背骨が残つて居るので良いと思つが、残つている中に農村の変化に対応する教化態勢を考えねばならん。云うならば、菩提寺的関係を、他の教団は皆そうなつて居る。我教団もそう云う傾向が強くなつて来ている。寺と門徒の間を法要儀式墓場へのパイプから信仰のパイプに取りかえねばならぬのであります。

菩提寺的関係でしか生きていない寺檀関係なんて、キリスト教や新興宗教にとつては考えられない事なのであります。キリスト教等では、牧師の信仰が門徒の向背をきめる、当然の事なのであります。葬式や法事のみでは教化を事とする宗教団体とは言えぬ、教化の機能が停止している証であります。

この際本當の意味で社会の不安要求に成る得る信心の道場に寺がならなければならぬのであります。このような状態であるから中々困難ではあるが、必ずしも見込みがの道場にする事でありませう。困難極まる事であるが、今この方向を切りかえて行く事は、日本の歴史社会からも要請されて居るのであります。と申しましても面倒な変つた事をするのでなく、年中行事を通じ、日常茶飯の生活にしみこんだ行事を捉えて教化の場にするのであります。宗派と云う閉鎖的な眼を注いで居ると、これは日暮れの教団であつて没落の運命にあると云う外ないのであります。

閉鎖性を破つて、広く現代社会の実情に眼を開くと、正しく宗教が求められて居る時代であります。民衆は無意識的であるが宗教を求めているのであります。正しく宗教の時代が開かれつつあるのであります。

一万の末寺百万の門徒と云つておつては日が暮れる外はない、これが全人類の核となると云う意気込で、懸命に近代社会の行き詰りに成えて、本當の人類の灯は浄土真宗しかないと言ふ教化の実践に、一応目標を十年後の誕生八百年におき、前進する教団、前向きな教団へと云う方向を見定めて行きたいと思つて居るのであります。